

枝 いっぱいの葉と眼と星
海で年越してきた雨の新鮮な翼
S・エルヘムバイル
Y・ジャルガイダライ

その後、夏石番矢司会による、第七回世界俳句セミナーに移り、国内外の俳句関連単行本につき七名のコメントーターによる発表をベースに会議出席者によって合評された。

まず井上智重『山頭火意外伝』（熊本日日新聞社、二〇一七年）について、長嶺千晶による報告があった。熊本時代を中心として山頭火の年譜を書き換える新発見が記載されており、その紹介があった。「漂泊の詩人」でロマンチストであった山頭火と現実主義者であったその妻サキノの確執にも触れられていて面白かった。続いて『現代俳句文庫 82 長嶺千晶句集』（ふらんす堂、二〇一七年）について、仙田洋子より報告があった。仙田は長嶺の句の特徴として、①生命の苦しみの表現②中村草田男への憧憬③キリスト者としての宗教性を挙げられる。俳句伝統の枠に安住しない宗教性は次の句にも見られる。

聖痕に指入れ見よと冬木影

夏石番矢からは『World Poetry 2017: An Anthology』(The Mongolian Academy of Culture and Poetry in 2017, Mongolia, 2017)に関するコメントがあった。同著は、前出のモンゴル世界詩人祭参加の四十三ヶ国八十六詩人の作品を収録したアンソロジー。夏石と鎌倉の俳句は、英語三行詩で収録されているが、内モンゴル詩人 E. Bold やモンゴル俳句協会の Khurelbatatar Urjin らの詩は二行詩で書かれている。

夏石番矢は続けて Maria Laura Valenteno の作品集『La carezza del Vento(風の愛撫)』(Associazione Culturale Luna Nera, Italy, 2018) についてコメント・興味深かったのは、異なった翻訳者によりイタリア語の「grembo」(子宮・ふところ)が、日本語「頭」、英語「womb」(子宮)、フランス語「tête」(頭)などと異なる単語で訳されていることだ。各言語固有のコンテクストに相応しい訳語を、翻訳者たちが取捨選択しているからだろうが、俳句の翻訳の問題に関しては、本セミナー後段の質疑応答でもひとしきり話題に上る。

鎌倉佐弓からは、第九回世界俳句協会大会のアンソロジーである、『**HAIKU: THE 9TH WORLD HAIKU ASSOCIATION CONFERENCE**』(MUP, Italy, 2017) に関するコメントがあった。第九回世界俳句協会大会に参加した十七ヶ国二十四人の俳句を収録。「風景」をテーマにした作品ながら、その「風景」の捉え方は各人多様多様。国際ペンクラブ副会長でマケドニア女性詩人カティツア・クラフコヴァの俳句が個人的かつ独創的との評。

Гром од ведро небо. / Ни светло, ни дом. / Танц на светлоста.

(青空の下の雷鳴／トランクも家もなし／光が踊

る)

夏石番矢の作品は「ベニスの商人」を超える着想。

(砂漠の劇場魂を買う金がない
The theater of teh desert / no money / to buy a soul)

鈴木比佐雄は、夏石番矢の日英二言語の句集『氷の禁域 / The Forbidden Zone of Ice』(Cyberwit.net, India, 2018) についてコメント。フィギュアスケート選手羽生結弦の総合芸術に昇華した演技に「世界俳句」を重ねて句を作っているとのコメントーターの指摘あり。

骨から炎骨から音楽氷の上

Flame from the bone / music from the bone / on ice

氷上で精神と肉体の極限に挑戦する個の力、それが音楽に表象される。鈴木は更に「骨からの音楽」に夏石の「世界俳句」にかける想いを見出す。

古田嘉彦は「サントシユ・クマール編」Haiku: A Concise Anthology (Cyberwit.net, India, 2018) について報告。同書は、英語による国際俳句のアンソロジーで、約二十ヶ国約四十人の詩人・俳人の共著。日本からは、夏石、鎌倉、古田が加わる。米国女性俳人ジーン・ルブランによる一句を、古田は推奨。

negative space / between raindrops / shards of glass

石倉秀樹は、ズラトカ・テイメノヴァとカジミエロ・ド・ブリトー共著『ESCRITO NO VENTO / PAROLES DE VENT』(edições Sérgio Ninguém/Eufeme, Portugal, 2017) について、コメントした。「風」をメインテーマにしたポルトガル語・フランス語二言語の発句だけの連句集。リスボン在住の二詩人の百句収録。ド・ブリトーの次の作が秀逸とのコメントがあった。

O homen na barca / a mulher no vento / irmãos siameses
l'homme dans la barque / la femme dans le vent / frères
siamoises
(舟に男 / 風に女 / シヤム双生児)

石倉からは更に西洋的対話法的な一対一の連句の手法と、日本的な一対多の拡散的な連句の手法の相違について指摘があった。

その後全員で、『世界俳句二〇一八 第十四号』について「翻訳などを論評し世界俳句セミナーを終了する。最後に、地下のレストラン・サンイチで長谷川破笑の司会のもと懇親会を開き、三浦元則演奏の箏篋、各参加者の俳句朗読を楽しむ。

三浦元則の第一曲目は箏篋の独奏「越天楽」。ついで古代歌謡を髣髴とさせるのびやかな催馬楽「更衣」の独唱、最後はレイ・チャールズのジャズ・ブルース曲「Georgia on my mind」を伝統楽器、箏篋で軽快に演奏し、箏篋と

いう楽器の多様性と奏者自身の才能を実感。森川俳句朗読については、ここでは一人一句ずつ紹介。森川雅美は即興詩で記録できない多言語（二言語が中心。最多三言語）で発表されたものは主言語を最初に記載した。

井の蛙 硯池の花を閑話せり 石倉秀樹
井蛙／閑話／硯池花

花満開わたしをほったらかしにして 鎌倉佐弓
Cherry blossoms / in full bloom, / just leave me alone

せせらぎへ散り込む花の無言劇 竹梵
To the creek / Scattering flowers / Pantomime

虬枝残雪疊紅靄暗香報春來 徐 依萃

枝は虬^{みずち}で残雪あり紅き靄に重なりて暗香春を告げ
來たる

a frozen snow on a snaking ume tree / through
blushing haze / silent fragrance with early spring

江南の空ほのぼのと夕燕 仙田洋子

Swallow fly around / the heart-warming evening sky /
of Jiangnan

自由詩「アンさんの笑顔の秘密」（題名のみ） 鈴木比佐雄

鰯雲いま顛末のどのあたり 鈴木光影

氷天国二足歩行はとても無理 夏石番矢

Paradise of Ice: / bepedalism / is such a bore
Paradis de glace / être bipède / est d'un tel ennui

星星に埋もれる十字架探し得ず 長谷川破笑
Cannot find out / a cross / among the stars

壊れやすいもの血色の紙のテントに貯める 古田嘉彦

Saving something / easily broken / in a rubby tent of
paper

囀りや詩は垂直に愛を告げ 長嶺千晶